

がい ぶ
艾 蕪 覚 え 書 VII

中 田 喜 勝

A Note on “Ai Wu” (VII)

Yoshikatsu NAKATA

ま え が き

1949年10月1日、中華人民共和国が成立し、国内には祖国建設の熱気が充満した。特に1950年代前半のあの活気は永遠に忘れることができない。人々は“互相幫助”（相互に助け合う）の精神を持ち、彼ら自身の祖国建設の為に立ちあがったのであった。

艾蕪はすでに四十五歳の中年ではあったが、水を得た魚のように、東奔西走した。国外（東欧・ソ連・日本・北朝鮮）への旅、第二第三次“南行”の旅の体験は、彼の作品にますます精彩を加えた。

今年、八十歳の艾蕪は成都になお健在で、依然として執筆の手を休めない。戦後の活躍ぶりを看ていくことにしたい。目次は次の通り。

- ① 戦後の艾蕪
- ② 足跡と作品
- ③ 春節（短篇小説—《南行記続篇》から）

① 戦後の艾蕪

中華人民共和国成立以来、1982年までの艾蕪の年譜は次の通りである。

1949年(昭24) 45歳

10月1日 中華人民共和国成立。

10月25日 全国作家協会の機関紙《人民文学》が創刊され、毛主席は“すばらしい作品が更に多く世に出ることを希望している。”という題

辞を寄せた。

- 11月30日 西南の重鎮である重慶が解放された。
- 12月 重慶が解放されてから間もなく、艾蕪は共産党・解放軍を讃え、そして革命文芸を讃える二篇の散文を次々に書いた。《解放軍創造了新文芸》が18日に重慶の《大公報》副刊の《新文芸》第一期に発表され、《歌劇〈劉胡蘭〉観后的感想》が25日に《新華日報》に発表された。同日、重慶の《大公報》に散文《解放后回憶社会大学》も発表された。
- 12月27日 四川省の省都の成都が解放された。本年末に西藏以外の中国大陸はすべて解放された。

1950年(昭25) 46歳

- 1月 元旦に散文《快樂和光榮的新年》を重慶の《新華日報》に発表、7日、映画評論《我喜歡〈回到自己隊伍來〉》を重慶の《新華日報》に発表。9日、映画評論《看〈淮海戰役〉的感想》を重慶の《新華日報》に発表。15日、散文《悼死難的烈士》を重慶の《新華日報》に発表。
- 2月 21日に散文《人民的福音》を重慶の《新華日報》に発表。
- 5月 短篇小説《郷行小説》を重慶の《大衆文芸》創刊号に発表。重慶市の文联準備委員会の依頼に応じて、任白戈と共に沙磁区の重慶大学と市の中央区とで“五四運動与文芸”という講座をそれぞれ持った。
- 6月 論文《繼承五四新文芸的優良傳統》を《大衆文芸》第二期に発表。本月、中央人民政府は艾蕪を重慶市人民政府委員に任命。
- 7月 1日に、散文《共産党二十九周年紀念日賀詞》を《新華日報》に発表。
- 8月・9月 文芸論文《青年与文芸》を《西南青年》第八期と第九期とに発表。
- 10月 1日に、散文《人民的祝賀》を《新華日報》に発表。19日に、重慶市文化界の魯迅記念大会で講演をして、文芸に従事する者は魯迅の人民のために服務する精神を学び、人民を心から愛し、文芸を人民の利益に合致させるようにすべきだと指摘した。
- 12月 報告文学《訪問張大富的母親》を《大衆文芸》(半月刊・重慶市文

聯主編)の二卷二期に発表。26日、通俗文芸を大いに普及し、群衆に深く入りこんで宣伝するために、唱詞《金鳳姐含冤訴苦情》を書き、短かい序文を附して、《説古唱今》(重慶市文联編)の1951年第三期に発表。

本年、艾蕪は重慶大学中文系主任、重慶市文联準備委員会副主任に任命された。(任白戈が主任、沙汀も副主任)

1951年(昭26) 47歳

- 2月 引続き重慶大学で教えたが、毎週一日の時間を割いて、重慶市郊外地区へ赴き、“清匪反霸”の工作に参加した。農民の反ボス糾明大会やグループ会議に参加したり、“農協”の積極分子を訪問したりした。
- 3月 西南軍政委員会の文教委員会委員に任命された。報告文学《悪霸地主石榮延》を《大衆文芸》二卷第五・六期合刊に発表。20日、西南軍政委員会第二回全委員会で発言し、その発言記録が重慶の《新華日報》に発表された。題目は《関于反悪霸的事情》。21日、雑文《農民堅決要求鎮圧反革命分子》を《新華日報》に発表。30日、沙汀らと共に《大衆文芸》編輯部主催の座談会に出席し、書報評論の仕事を進める問題について討論した。31日、西南文联準備委員会は重慶大学文学院で中国古典文学研究者座談会を挙げたが、艾蕪と邵力子とが会議を司会し、中国伝統の人民文学をいかに受け入れるかという問題について、主として討論した。
- 4月 中篇小説《郷愁》が上海の文化工作社から再版された。24日、重慶市第一次文学芸術工作者代表大会が召集され、艾蕪は祝辞《祝賀》を書いて、5月5日の《新華日報》に発表された。29日、重慶の文協は総会を挙行し、艾蕪が主席となり、挨拶をした。大会は艾蕪・方敬・李南力ら23名を執行委員に選出した。
- 5月 1日、重慶市は“慶祝五一、反対美国武装日本大会”を挙行し、劉伯承・鄧小平・賀龍・任白戈・沙汀・艾蕪らが主席団となった。8日、重慶市文芸工作者大会は終了し、重慶市文联が成立して、任白戈・沙汀・艾蕪ら45名が執行委員に選出された。本月、艾蕪は重慶市郊外地区歌樂山郷の共和村へ行き、“土地改良”に参加して、《参加土改工作的一点收穫》を書き、本月29日の重慶の《新華

日報》に発表された。

- 6月 7日、散文《努力工作、支援前綫》を《新華日報》に発表。17日、重慶市文联召集の討論会に出席して、劉盛亞の小説《再生記》について討論した。その時の出席者には伍陵・曾克・柯崗・蕾嘉らがいた。
- 7月 15日、短論《武訓的眞面目及其歌頌者所做的偽裝》を重慶の《新華日報》副刊《新華文芸》に発表。重慶市文联召集の劉盛亞の小説《再生記》討論会での発言もこれに発表された。16日、短論《撲滅帝國主義的耗子》を《新華日報》に発表。
- 8月 19日、《我們的檢討》を《新華日報》に発表。31日、中央人民政府は艾蕪を重慶市人民政府文化局局長に任命した。
- 9月 10日、重慶市の文芸工作者の現況を紹介する散文《略談学習、鍛煉和創作》を《文芸報》四卷第十一・十二期合刊に発表。23日、散文《向魯迅先生學習—紀念魯迅先生七十誕辰》を《新華日報》に発表。
- 10月 生れて始めて北京へ行き、中国人民政治協商会議第一次全国委員会第三回會議に列席した。31日、毛沢東・周恩来らの党と国家の指導者に会った。艾蕪は政協會議で発言した。
- 11月 6日、中国人民政治協商会議第一次全国委員会第三回會議での発言が《新華日報》に発表された。
- 12月 論文《為了適應工農兵的要求、必須提高文芸工作者的政治思想水平》を《西南文芸》第三期に発表。
 本年末、“三反”・“五反”の運動が全国に展開された。文芸界は整風學習の運動を始めた。

1952年(昭27) 48歳

春節に周恩来同志が講話を発表し、知識分子が農村や工場へ行くことを呼びかけた。

- 3月 全国文联は整風學習の情況に基づいて、“作家が生活に密着して創作を進めるようにする”ことを今後の仕事の中心任務とすることを決定した。7日、第一次の生活に密着した作家として、艾蕪は夫人の王蕾嘉と共に北京を離れ、鞍山製鉄所へ行って、生活に深く入りこみ、当該工場の総工会文教部副部長を担任した。(北京を

離れる際には、朝鮮前線へ初めて赴き、生活に深く入りこむ巴金・古元・葛洛・黃谷柳ら10名あまりと同行し、瀋陽で分かれ、巴金らは朝鮮へ赴いた。) 10日、《文芸報》第五期は社論《長期地、無条件地全身到工農兵群眾中去》を発表して、作家が農村か工場へ行くことを呼びかけた。

1953年(昭28) 49歳

- 1月 報告文学《一個普通工人的偉大創造》が《文芸報》第一期に発表された。
- 3月 5日、スターリンが逝去。艾蕪は散文《你永远活在我們的心裏》を書いて、哀悼の念を表わした。この文は《人民文学》第四期に発表された。
- 4月 中央人民政府政務院は艾蕪を重慶市人民政府文化教育委員会副主任に任命した。
秋、艾蕪の全家族は鞍山から北京に移り、以後、北京に十三年の長きにわたって居住した。
- 9月 23日から10月6日まで、中国文学芸術工作者第二次代表大会が北京で開催された。大会期間中、文联所属の各協会はそれぞれ会議を開いた。文联は名称を“中華全国文学芸術界联合会”と定めた。全国文協は改組されて、中国作家協会となった。艾蕪はこの時の大会及び文協会員代表大会に出席した。
- 10月 短篇小説《新的家》を《人民文学》第十期に発表。これは艾蕪が新しい労働者の生活を題材とした最初の作品である。作協の創作委員会の小説グループが作家に艾蕪の長篇小説《百煉成鋼》の初稿を討論させた。
- 11月 《艾蕪短篇小説集》が人民文学出版社から出版された。作品十八篇を収める。
本年、艾蕪は改めて中国共産党に入党した。

1954年(昭29) 50歳

- 1月 鞍山製鉄所の模範労働者孟泰の進歩的な事蹟を内容とした特別作品《屋根裏的春天》を《文芸報》第一期に発表。
- 2月 文芸短論《練習写小説先從哪里開始》を《文芸学習》第二期に発表。

- 3月 短篇小説《夜帰》を《人民文学》第三期に発表。15日、文芸短評《読〈詩〉一得》を《光明日報》に発表。
- 5月 散文《五四の浪花》を《人民文学》第五期に発表。
- 6月 3日、中華全国総工会と中国作家協会は联合して、北京在住の作家と文芸工作者との座談会を開き、文芸創作は国家の工業建設をどのように表現するかということと文芸工作者が工場へ行って、生活を体験することを話し合った。会に参加した作家と文芸工作者は約90名あまりいた。艾蕪は会で発言した。本月、短篇小説《百吨吊車》を《説説唱唱》第六期に発表。散文《勞動人民成為国家的主人》を《文芸報》第十二期に発表。
- 7月 文芸短論《回答〈文学学習〉編輯部的問題》を《文芸学習》第七期に発表。
本月、胡風は党中央へ三十万語の意見書を提出した。
- 8月 短篇小説《新的家》が通俗読物出版社から単行本で発行された。29日、中国作家協会創作委員会が開いた座談会に出席して、文学作家へ対する労働者の意見を聴取した。座談会に出席した作家には周立波・曹禺・沙汀・臧克家がいた。
- 9月 15日、第一次全国人民代表大会第一回会議が開催された。会議は毛沢東同志を国家主席、朱徳同志を副主席に、劉少希同志を全国人民代表大会の常任委員に、周恩来同志を國務院総理に選んだ。艾蕪は四川省代表としてこの時の人民代表大会の会議に出席した。本月、散文《美好的日子》を《文芸報》第十八期に発表。短篇小説《剪刀》を《中国青年》第九期に発表。
- 10月 特別作品《北京的秋夜》を《人民文学》第十期に発表。
- 11月 ハンガリー諸国との作家相互派遣協定に基づいて、中国作家協会は艾蕪と作家雷加の一行をハンガリー・チェコ・ソ聯へ見学訪問のため派遣することを決めた。本月、出発し、先ずハンガリーに行き、約一ヶ月滞在した。短篇小説《輸血》を《人民文学》第十一期に発表。
- 12月 書き下ろし《会见》を《西南文芸》第十二期に発表。本月2日、中国科学院院務会議と中国作家協会主席団とが联合会議を開き、胡適思想を批判する討論会を開くことを決定した。

1955年(昭30) 51歳

- 1月 ハンガリーを離れ、チェコスロバキアを見学のため約一ヶ月半訪問した。
- 2月 長篇小説《山野》を修訂して、作家出版社が出版した。本月5日、作家協会主席団は拡大会議を開き、胡風の資産階級唯心主義文芸思想の批判を展開することを決定した。《文芸報》第一・第二期は胡風の意見書を附録として発表した。
- 3月 チェコからポーランドへ行き、ワルシャワに三日滞在し、更にソ聯の見学旅行を約一週間してから帰国した。29日、全国作家協会主催の座談会に参加して、《漢字簡化方案》(草案)を討論した。本月、短篇小説《輸血》が通俗読物出版社から単行本として出版された。
- 4月 外国での所見・所感を記した散文を新聞や雑誌に発表し始めた。3日、《訪問匈牙利的模範施工孟斯卡・伊姆萊》を《人民日報》に発表。5日、《在麗拉浮銳德的一天—匈牙利印象記》を《光明日報》に発表。11日、《匈牙利偉大的無産階級革命詩人尤若夫・阿蒂亞》を《光明日報》に発表。本月、《幸福的国家裏—慶祝捷克斯洛伐克共和国國慶十周年》を《文芸報》第八期に発表。《布拉格散記》を《旅行家》第四期に発表。
- 5月 散文《匈牙利的礦工城市科姆洛—匈牙利印象記》を《人民文学》第五期に発表。10日、散文《我和捷克斯洛伐克工人在一起的時候》を《人民文学》第六期に発表。
- 6月 散文《群衆是欺騙不了的》を《人民文学》第六期に発表。
本月、艾蕪は全国人民代表大會視察団員として、四川の新繁県・彭県などの地に帰って来て、農業合作運動の情況を理解した。これは彼が1925年以後、初めての帰郷であった。視察期間は約一ヶ月。郷里の清流場で二番目の弟、湯道安、四番目の弟、湯道遠及びそれらの家族と会見した。その後、成都から重慶へ行き、船で武漢へ行って、北京へ帰った。
- 7月 続いて散文二篇を発表して、帰郷の見聞と感想とを述べた。《統購統銷在我的家郷》を5日の《人民日報》に、《千百年来的自然環境改變了一家郷散記》を《文芸報》第十三期に発表。
- 8月 散文《捷克斯洛伐克辺防軍訪問記》を《文芸月報》第八期に発表。

- 9月 短論《我從胡風反革命事件中取得的教訓》を《人民文学》第九期に発表。
- 10月 短篇小説《夏天》を《人民文学》第十期に発表。
- 11月 特別作品《在煉鋼廠的吹炉旁边》を《人民文学》第十一期に発表。《充肝的新生力量—記全国青年社会主义建設積極分子師東興》を《解放軍文芸》第十一期に発表。散文《田野歡樂地笑着—家鄉散記》を《文芸報》第二十一期に発表。
- 12月 短篇小説《幸福》を《人民文学》第十二期に発表。

1956年(昭31) 52歳

前半年、艾蕪は政協委員、全国人大代表として、東北へ行き、農業合作社運動を視察した。期間は約一ヶ月。経過場所は瀋陽・鞍山・撫順・大連・丹東など。

- 2月 散文《在高堯徳総林養所—匈牙利印象記》を《旅行家》第二期に発表。
- 4月 散文《維納尔日采村兩日記》を《旅行家》第四期に発表。
- 5月 毛主席は最高国务会議で“百花齊放・百家争鳴”の方針を提示した。
- 6月 特別作品《三峡中的航標員—先進工作者鄭興高》を《解放軍文芸》第六期に発表。
- 11月 散文《我与蘇联文芸》を《文芸報》第二十二期に発表。散文《匈牙利、我祝賀你的勝利》を10日の《光明日報》に発表。

1957年(昭32) 53歳

- 1月 “人大”代表として浙江へ視察に行った。経過路線は大体次の通り、北京→上海→杭州→紹興→寧波→四明山区→余姚→杭州
- 2月 散文《視察日記二則》を《北京文芸》第二期に発表。本月27日、毛主席は最高会議で報告をした。題目は《關於正確处理人民内部矛盾的問題》。艾蕪はこの会議に列席した。
- 3月 文芸短論《讀了〈组织部新来的年青人〉的感想》を《文芸学習》第三期に発表。劇評《川劇〈拉郎配〉》を1日の《人民日報》に発表。
- 4月 短篇小説《雨》を《人民文学》第四期に発表。文芸短論《看〈譚記兒〉演出后的感想》を《戲劇報》第二期に発表。

- 6月 21日、散文《四明山区速写—浙江紀行》を《人民日報》に発表。
- 7月 長篇小説《百煉成鋼》が《収獲》第一期に登載され始めた。9日、《収獲》第二期に連載。短篇小説《春天好風》を《人民文学》第七期に発表。31日、作協党組拡大会議第八回会議で張天翼・沙汀と共に発言した。題目は《你要不要重新作人》。
- 8月 中共の正式黨員となった。文芸短論《去掉文芸上的右傾思想》を《文芸學習》第八期に発表。《“但丁”与“歌德”》を《人民文学》第八期に発表。《靈魂深处的毒瘤》を22日の《人民日報》に発表。本月、散文《光榮勤勞的山地人民—浙東紀行》を《旅行家》第八期に発表。浙東では更に紹興の魯迅の故居を見学して、散文《魯迅的故郷—浙東紀行》を書いた。本月29日、作家の周潔夫・アル瑪什と共に見学訪問のため蘇聯に赴いた。
- 10月 17日、ソ聯の作家レフ・トルストイのヤスヤナ・ポルアナに在る故居を見学し、28日、ソ聯10月革命後に建設された最初の水力発電所—トネポ水力発電所を見学した。
- 本月、文芸短論《談所謂写真实》を《文芸報》第二十四期に発表。
- 本月、中国の作家・芸術家133名は“不准联合国干涉匈牙利内政”の抗議書にサインした。艾蕪はこの活動に参加した。
- 11月 8日、レーニンのコンクに在る故居を訪問した。15日から29日までゴルチアを訪問した。28日、スターリンの故郷—コリを訪ねた。30日、アルメニアへ行き、約10日後にモスクーに帰った。
- 12月 28日、散文《從烏克蘭寄給孩子們的信》を《人民日報》に発表。
- 1958年(昭33) 54歳
- 1月 8日、散文《在德聶泊水電站》を《光明日報》に発表。
- 本月、《人民文学》の編輯委員會の改選で、張天翼が主編となり、陳白塵・韋君宜・葛洛が副主編となり、艾蕪・周立波・趙樹理らが編輯委員となった。
- 本月26日、《文芸報》第二期“再批判”專欄では丁玲・王実味・肖軍・羅烽・艾青らが1942年に書いた文章に対して二回目の批判を行った。
- 2月 ソ聯から帰国。6日、雜文《春天裏的春天》を《人民日報》に発表。特別作品《洋河大渠》を《人民文学》第二期に発表。

- 3月 散文《訪問蘇聯的煉鋼工人》を《処女地》第三期に発表。《李紹奎一關於一個煉鋼工人的筆記》を《新港》第二・第三合刊号に発表。文芸短論《高尔基永遠走在我們的前頭》を28日の《人民日報》に発表。日記《在馬哈拉子的日子》を《收穫》第二期に発表。
- 本月、《文芸報》編輯部が会議を主催して、周揚の《文芸戰綫上的一場大弁論》について話し合った。会の出席者には鄭振鐸・臧克家・艾蕪ら12名がいた。《文芸報》第六期は《為文学芸術大躍進掃清道路》という総題目のもとで、出席者の発言を発表した。
- 艾蕪の発言題目は《讀了〈文芸戰綫上的一場大弁論〉的感想》であった。
- 4月 散文《訪問蘇聯的軋鋼工人》を《文芸月報》第四期に、《在拿塔奈比村一訪問蘇聯農村日記》を《新觀察》第八期に、特別作品《兩個時代的傷痕》を《人民文学》第四期に発表。16日、艾蕪は北京郊外の石景山鋼鐵工場へ赴き、《文芸報》が主催した小会議に参加して、一部の鋼鐵関係の労働者と《百煉成鋼》について話し合った。席上、艾蕪は発言して、どのようにして生活に密着し、作品中の人物を創造するかということについて言及した。
- 散文《我要同工人農民一道躍進》を《人民文学》第四期に発表。
- 5月 十三陵ダムへ赴き、実際に労働して生活を体験し、同時に工程指揮部の政治部副主任を担任した。《艾蕪中篇小説集》が天津の人民出版社から出版された。作品七篇を収める。文芸短論《評〈沈黙〉》を《人民文学》第五期に発表。
- 本月3日、《人民日報》は林黙涵の文章《現實主義還是修正主義》を発表して、秦兆陽の《現實主義—広闊的道路》の文中の考え方を批判した。
- 6月 長篇小説《百煉成鋼》が作家出版社から出版された。同時に作家出版社は更に短篇小説《夜歸》を出版した。作品八篇を収める。
- 散文《訪問蘇聯又紅又專的工程師》を《処女地》第六期に発表、《在亞爾美尼亞農村中—訪問蘇聯農村的日記》を《新港》第六期に発表。
- 7月 十三陵作業現場から北京へ帰った。
- 8月 政治論文《全力支持阿拉伯人民的正義斗争》を《人民文学》第八期に発表。《警告艾森豪威尔》を《文芸報》第十六期に発表。散文

《在查沈羅什鋼鐵廠一訪問烏克蘭的日記》を《新觀察》第十六期に発表。18日、中国作家協会が召集した《作家深入生活座談会》に参加し、席上で発言して、十三陵ダム工事が政治が先頭に立って指導したためにいかに時間をかせいだかということについて述べた。

9月 《秦徳貴奮勇炸鋼渣》（《百煉成鋼》から選ばれた。）が上海の文芸出版社から出版された。27日、中国文联主席団の拡大会議に参加し、席上、張天翼・周立波と共に原稿料・報酬を下げることにについて提議し、29日、《人民日報》はこの建議を発表した。本月、観光で帰国した古い友人一華僑の詩人、翻訳家の黄綽卿と会見した。

10月 31日から12月26日まで《文芸報》編輯部は連続して七回、座談会を召集し、更に一步を進めて、革命現実主義と革命浪漫主義との結びつきの問題について討論した。艾蕪は最初の座談会に参加して発言した。

11月 解放後最初の艾蕪の散文集《初春時節》が百花文芸出版社から出版された。作品二十一篇を収める。文芸短論《新的指示，新的号召》を《人民文学》第十一期に発表。

12月 短篇小説集《新的家》が人民文学社から出版された。作品三篇を収める。28日、散文《更大勝利的発端》を《人民日報》に発表。

1959年(昭34) 55歳

1月 文芸論文《就作品中的人物来談革命現実主義和革命浪漫主義相結合的問題》を《人民文学》第一期に発表。

2月 《艾蕪選集》が人民文学出版社から出版された。作品二十三篇を収める。艾蕪は《后記》を書いた。

3月 18日、文芸論文《川劇〈鬧文廷〉—學習文学遺產筆記》を《光明日報》に発表。26日、《浪漫主義和現實主義結合一例—川劇〈柜中縁〉觀后感》を《人民日報》に発表。

4月 中旬、第二次全国人民代表大会に出席。本月18日、周総理は人民代表大会で《政治工作報告》を行ったが、報告の第三部分“我們在文化教育戰綫上的任務”は“双百方針”を貫徹することと労働者階級に知識分子の隊伍を創り出すことを特に強調した。

5月 3日、周総理は人民代表大会の代表、政協委員の中の一部の文

芸界の人士及び北京在住の一部の文芸工作者を招いて、中南海の紫光閣で座談会を開催した。周総理は席上《关于文化艺术工作两条腿走路的问题》の報告をした。艾蕪はこの時の会議に出席した。

6月 散文集《欧行記》が天津の百花文芸出版社から出版された。作品二十四篇を収める。

本月、《百煉成鋼》の朝鮮語訳が出版され、艾蕪はこの書の《序言》を書いた。

8月 長篇小説《百煉成鋼》が《人民文学出版社》から、“建国十年来優秀創作”の中に入れられて再び出版された。

本月29日、中国文联主席団は拡大会議を召集して、八次の八中全会議の決議と報告書について話し合った。会議に出席した者は郭沫若・老舍・田漢ら100名あまりであった。艾蕪はこの会議に出席した。

10月 論文集《浪花集》が北京の人民出版社から出版された。作品三十七篇を収める。散文《陳効法》を《人民文学》第十期に発表。文芸論文《文芸創作的首要条件—深入生活与学習理論相結合》を《文芸報》第十九・第二十期合刊号に発表。

11月 短篇小説《国家》と《鋼鉄的人》（《百煉成鋼》から選ばれた）とが作家出版社から、“文学初歩読物”の中に入れられて出版された。

1960年(昭35) 56歳

3月 文学回顧録《回憶我在“左联”的幾件往事》を《文学評論》第二期及び《文芸報》第五期に発表。

7月 22日から8月14日まで、第三次全国文芸工作者代表大会が北京で開催された。周総理・陳毅副総理、李富春副総理が席上、報告をした。艾蕪はこの時の大会に出席した。本年、艾蕪は肺結核を患い、北京で療養した。外地へも行かず、創作も少なかった。

1961年(昭36) 57歳

3月 《文芸報》第三期が編輯部の文章《題材問題》專欄を発表した。

6月 1日から28日まで中共中央宣伝部は新僑飯店で全国文芸工作者座談会を開き、艾蕪はこの会に出席した。6月8日から7月2日まで、全国故事フィルム創作会議が北京で開かれた。6月19日、

周総理はこの二つの会の席上で、重要な講話をした。

- 9月 艾蕪は二度目の“南行”を始めた。同行者は沙汀・林斤瀾・劉真らがいた。この時の南への旅の路線は次の通り。

北京→成都→重慶→貴陽→昆明→保山→芒市→畹町→瑞麗→隴川→芒市→騰冲→盈江→保山→昆明

昆明に到着した時はすでに年末に近かった。

本月、短篇小説《月夜》を《四川文学》第九期に発表。

- 11月 短篇小説《高原上》を《人民文学》第十一期に発表。

1962年(昭37) 58歳

- 1月 8日、散文《歡樂的旅行》を《雲南日報》に発表。春節後、艾蕪らは昆明から出発して旅行を続けた。道順は次の通り。

昆明→思茅→允景洪→勐納→思茅→沿江→墨江→昆明

- 3月 昆明から南寧、武漢、南京へ行った。本月、第二回目の“南行”で得た素材で創作を進め、《南行記続篇》という副題で、次々に新聞や雑誌に発表した。最初のは短篇小説《瑪米—南行記続篇之一》で、《辺疆文芸》第三期に発表。

本月、全国の話劇・歌劇創作座談会が広州で開かれた。周総理・陳毅副総理はわざわざ会に出席して、重要な講話をした。

- 4月 月初め、艾蕪は北京へ帰り、第二回目の“南行”の旅を終えた。

- 5月 短篇小説《野牛寨—南行記続篇之一》を《人民文学》第五期に発表。散文《深夜的鳥》を《広西文芸》第五期に発表。本月4日から13日まで、河北省文联は保定で短篇小説座談会を開き、短篇小説を書く技巧をどのようにして向上させるかと問題について討論した。艾蕪・侯金鏡が会議に出席して話をした。

本月16日から25日まで、河北省文联は一部の若いアマ作家を招いて座談会を開き、短篇小説を書く技巧をいかにして向上させるかということを検討した。艾蕪・康濯・魏巍らは要請に応じて、席上、発言をした。

- 6月 16日、文芸評論《好的喜劇—〈抓壮丁〉観后》を《中国青年報》に発表。

- 8月 短篇小説《瀾滄江辺—南行記続篇之一》を《河北文学》第八期に発表。

- 10月 長篇小説《百煉成鋼》が作家出版社から再版され、艾蕪は《再版前言》を新たに書いた。文芸論文《論劉真的短篇小説》を《文学評論》第五期に発表。
- 11月 6日、散文《為了和平我們準備戰鬥》を《中国青年報》に発表。
- 12月 短篇小説《芒景寨—南行記続篇之一》を《人民文学》第十二期に発表。

1963年(昭38) 59歳

- 1月 短篇小説《如哈寨—南行記続篇之一》を《人民文学》第一期に発表。文芸隨筆《生活基地的拡大和深入》を《文芸報》第一期に発表。
- 2月 短篇小説《辺疆女教師—南行記続篇之一》を《四川文学》第二期に発表。本月、艾蕪は北京から四川へ帰り、先ず重慶に到着してから成都へ行き、楊益言・羅広斌・劉徳彬・沙汀との一行5名は達県・南充・万県などの地へ赴いて、老紅軍と老地下黨員とを訪問し、革命の史実を多く書き留めた。この時の訪問活動は約一ヶ月あまりであった。
- 4月 成都へ帰り訪問を続けた。6日、以前に帰った故郷の新繁県・清流場へ行き、四番目の弟、湯道遠らの親戚と会見した。
- 5月 成都市の一部の文芸工作者の座談会に出席して発言。この発言内容は《四川文学》六月号に発表された。
- 6月 北京へ帰る。
- 7月 北京北郊外地区の樓梓莊公社へ行き、農村の“四清運動”に12月まで参加。
- 9月 続いて、“南行記続篇之一”を副題にした一連の短篇小説を発表。《野桜桃》を《四川文学》第九期に、《攀枝花》を《上海文学》第九期に、《霧》を《山花》第九期に、《初寨人家的歴史》を《人民文学》第九期に発表。
- 11月 小説集《南行記》が作家出版社から新版で出版された。作品二十四篇を収める。解放前に発行された二版の中の十二篇の外に、新たに短篇小説十一篇と中篇小説一篇とが加えられ、艾蕪は《新版后記》を書いた。

1964年(昭39) 60歳

- 1月 散文《百事哀の命運改变了》を《収獲》第一期に発表。
- 2月 短篇小説《群山中一南行記続篇之一》を《収獲》第二期に発表。
《苦難的童年(家史)》を《人民文学》第二期に発表。春節後、作家協会が組織した慰問団に参加して、大慶油田へ慰問に行った。大慶の大規模ですばらしい作業工程に魅せられ、作品の中に反映させることを決心した。そこで、自発的に留まり、二ヶ月ほど滞在して多くの素材を捜し集めた。
- 3月 文聯と各協会は“整風”を始め、仕事を点検した。
- 6月 短篇小説《采油樹下》を《人民文学》第六期に発表。
- 7月 短篇小説《灰塵》を《北京文芸》第七期に発表。
- 9月 短篇小説集《南行記続篇》が作家出版社から出版された。作品十二篇を収める。
- 11月 短篇小説集《南行記》が作家出版社から新たに再版された。
- 12月 22日、第三次全国人民代表大会第一回会議が開催された。艾蕪はこの会議に出席した。

1965年(昭40) 61歳

- 春、艾蕪は四川に帰り、郫県の安德舗へ行き、農村の“四清”運動に7月までずっと参加した。
- 夏、次女の継代と共に北京へ帰った。
- 11月 一家は成都へ移り帰った。

1966年(昭41) 62歳

前半年に、艾蕪は主として長篇小説《春天的霧》を書くことに従事した。しかし、前半分の原稿(約十七万字)を書き終った時、《文化大革命》が始まり、擱筆を余儀なくされた。

1968年(昭43) 64歳

- 艾蕪は所謂“三十年代作家”の罪名で“学習班”に無理やり入れられ、家に帰ることができなかった。
- 8月 17日、艾蕪は成都北方の郊外に設けられた昭覚寺の臨時監獄に入れられ、以後、身の自由を失うこと四年の長きにわたった。獄

中では暇な時には時間を割いて、マルクス・エンゲルス全集・レーニン全集を通読し、更に多くの哲学書を読んだ。例えば、アリストテレスの《形而上学》・スピノザーの《神学政治論文》・ヘーゲルの《論理学》などである。外国語版の古典の名著、例えば、シェークスピアの《リヤ王》などである。偶々、旧体詩を吟じて心を慰めた。

1972年(昭47) 68歳

- 3月 8日、艾蕪は釈放されて出獄した。
- 7月 大小涼山へ行き、彝族の解放前後の生活ぶりを理解した。約二ヶ月が経過した。道順は大体次の通り。
 成都→宜賓→新市鎮→雷波→昭覺→美姑→布施→西昌→成都

1973年(昭48) 69歳

- 1月 涼山での見聞に基づいて書きあげた短篇小説《高高的山上》を《四川文学》第一期に発表。
- しかし、すぐに“四人組”が支配している“文化組”(後に“文化部”と改称)の攻撃に遇った。従って、創作は再び中断される破目となり、家の中で《詩經》を研究した。

1976年(昭51) 72歳

- 11月 1日、《四川文学》編集部は一部の工・農・兵のアマ作家とプロの文芸工作者を招いて座談会を開き、党中央が“四人組”を一挙に粉砕したことを心から祝った。艾蕪は招きに応じて会に出席して発言した。

1977年(昭52) 73歳

- 艾蕪は改めて筆を執って創作をした。復刊後の《四川文芸》の顧問を担当した。
- 8月 23日、《四川文芸》編集部は省と市の一部のプロとアマの作家を招いて座談会を開き、党の“十一大”と“一中全会”の開会を祝った。李亞群・張秀熟・沙汀・艾蕪・周克芹らが招きに応じて出席し、発言した。

- 11月 《人民文学》編集部は北京で短篇小説創作座談会を開いた。本月20日、《人民日報》編集部は文芸界の人士を招いて座談会を開き、“文芸黒綫專政”論を断固打倒し、徹底的に批判した。
- 1978年(昭53) 74歳
- 1月 短篇小説《襯衣》を《上海文芸》第一期に発表。本月、《詩刊》は《毛主席給陳毅同志談詩的一封信》を発表。以後、文芸界にはまた形象思維の問題について討論が展開された。
- 本月2日、《四川文芸》と《四川日報》編集部とが联合して、成都地区の文芸界の人士を招き、《毛主席給陳毅同志談詩的一封信》学習の体験を自由に話し合った。座談会に参加した者は沙汀・艾蕪・雁翼・傅仇ら40名あまりがいた。
- 2月 文芸論文《談短篇小説》を《四川文芸》第二期に発表。
- 5月 自伝体の小説《我的青年時代》が香港の港青出版社から再版された。
- 本月27日から6月5日まで、中国文联第三期全国委員会第三次扩大會議が北京で開かれた。これは文芸界の乱れをただす最初の盛んな会であった。艾蕪はこの會議に出席した。それは彼が四川に帰って以来、最初の北京行であった。北京に十日あまり滞在してから、西安へ行き、半坡村遺蹟などの文化遺蹟を見学した。三日後、成都に帰った。
- 6月 《艾蕪短篇小説選》が香港の文教出版社から出版された。
- 本月20日、無産階級文芸の偉大な戦士、郭沫若同志が逝去。
- 7月 郭沫若同志を悼んで書いた散文《你放下的筆、我們要勇敢地拿起来》を《四川文芸》第七期に発表。本月15日、《文芸報》が停刊十二年後に復刊された。
- 8月 《艾蕪短篇小説選》が“四人組”打倒後初めて再版されたので、《重版題記》を書いた。この文章は《文学評論》第四期に発表された。
- 9月 短篇小説集《夜歸》が四川人民出版社から出版された。この新版は従来収めていた八篇の外に六十年代に発表した作品六篇を加えて合計十五篇、艾蕪は《新的家》・《幸福》二篇について改めて手を加えると同時にこの書のために《前言》を書いた。(十一月五日に成

都日報に発表された。)

本月、作家が生活に深く入りこみ、すばらしい工業戦線の情況や新しい人物を反映させることを促進するために、中国作家協会は《人民文学》・《文芸報》そして《人民日報》文芸部に委託し、一部の文芸工作者を集めて大慶や鞍山製鉄所へ行かせて、訪問学習を進めた。この作家学習訪問団は25の省市の五十名あまりの文芸工作者から編成されていて、艾蕪が団長、徐遲・劉劍青が副団長であった。

9日、作家協会と《人民日報》とが聯合して大会を開き、工業生産の第一線へ行く学習訪問団を歓送した。この時の学習訪問の活動は20日あまりかかった。

10月 4日から13日まで、四川省文联委員会は拡大会議を開き、省の文联及びその所属の各協会が業務を正式に回復したことを宣布した。

11月 《艾蕪短篇小説選》が人民文学出版社から再版された。作品二十四篇を収める。(《艾蕪選集》よりも《太原船上》など四篇多く収められ、《瞎子客店》など三篇が削除されている。)《重版題記》一篇がある。

1979年(昭54) 75歳

1月 散文《鞍鋼呵，我回来了》を《戦地》増刊第一期に発表。短篇小説《紅艷艷的罌粟花—南行記続篇之一》を《紅岩》第一期に発表。

《還郷記—革命戦争的插曲之一》を《人民文学》第一期に発表。文芸論文《漫談科学与文学》を《科学文芸》(叢刊・成都)第一期に発表。

2月 22日、散文《悼邵荃麟同志》を《文芸報》第四期に発表。

3月 9日、創造社の社員と老作家鄧均吾同志を悼んで書いた散文《懷均吾同志》を《重慶日報》に発表。文芸論文《関于〈詩經〉中的一些“行”字的探討》を《社会科学研究》(四川)創刊号に発表。本月26日、全国の優れた短篇小説の選評、表彰大会が北京で開かれた。

5月 4日、四川省の団委が開いた“五四”運動を記念する座談会に出席して即興の詩一首を作った。“新潮滾滾六十年 英烈豐碑聳雲天 叱咤風雲搞四化 江山水麗色更艷”

6月 中旬、樂山へ行って、“郭沫若研究學術討論会”に参加した。そして発言した。

- 7月 長篇小説《豊饒的原野》が四川の人民出版社から出版された。これはこの書の解放後最初の印刷発行で、《前言》一篇がある。
- 8月 詩歌《参加郭沫若學術討論會有感》を《四川文学》第八期に発表。散文《談文艺刊物》を《沫水》(樂山)創刊号に発表。
- 10月 20日、《笑話一則》を《人民日報》漫画増刊《諷刺与幽默》第十期に発表。
 本月30日から11月6日まで、第四次全国文学芸術界代表者大会が北京で開かれ、文联所属の各協会も同時にそれぞれ会議を開いた。艾蕪はこの文学代表者会議に出席して発言した。題目は《繁榮文艺必須肅清封建流毒》で、《人民日報》12日と17日に《文学評論》第六期にも発表された。同期に開かれた作家協会第三次會員代表者大会で艾蕪は第三次理事会の理事に選ばれた。
- 11月 散文《雲南在我的心地上播下了美好的種子》を《边疆文学》第十一期に発表。散文《兩件往事的啓發》を12日の《工人日報》に発表。《回憶周立波同志》を《四川文学》第十一期に発表。
 本月から1980年の二月まで中篇小説《山中歷險記》が四期に分けて《四川文学》に登載された。
- 1980年(昭55) 76歳
- 1月 23日から3月13日まで、中国劇作家協会・作家協会・映画シナリオ作家協会が聯合して、シナリオ創作座談会を開いた。会議はシナリオ《假如我是真的》、映画文学シナリオ《在社会的檔案裏》・《女賊》について、討論した。創作には普遍的な意義があるという問題について真剣に討論し検討された。胡耀邦同志が席上、重要で長い講話を行った。
- 3月 短篇小説集《南行記統篇》が人民文学出版社から新しく出版された。内容はもとのまま。文学回顧録《漫談三十年代的“左联”》を《人民文学》第三期に発表。
- 4月 1日、中国作家の日本見学訪問団に参加。団員の一行は12名、団長は巴金、副団長は謝冰心、林林、団員には草明・公木・杜鵬程・鄧友梅らがいた。東京・大阪・京都など六つの都市を訪問し、17日間の友好訪問を行った。
 本月、短篇小説集《南行記》が人民出版社から新しく出版され

た。依然、二十四篇の短篇と一篇の中篇とを収める。

5月 文芸論文《關於三十年文芸的一些感想》を《新文学論叢》第一輯に発表。

6月 散文《我永遠不会忘記》を《芸叢》(四川) 創刊号に発表。散文《都江堰的新話故事》を28日の《人民日報》に発表。

本月、四川省文芸工作者第二次代表者大会が成都で開かれ、会議は省文联と各協会の指導者を選出した。省文联主席には馬識途が、名譽主席には任白戈・艾蕪・沙汀が選出された。作家協會の省分会の主席には馬識途が、名譽主席には艾蕪が選ばれた。

7月 散文《地貌的青春》を《収獲》第四期に発表。

10月 5日、散文《東京的一天》を《成都日報》に発表。散文《酒・菜・川菜》を《文明》(四川) 創刊号に発表。

11月 成都市川劇院が川劇芸術家陽友鶴の舞台生活六十年の祝賀会を開催した。艾蕪が陽友鶴のために書いた祝賀の詩《舞台歌樹六十年》を20日の《成都日報》に発表。

散文《宮島紀游》を《旅游天府》(四川) 第一期に発表。

本月下旬、“重慶地区中国抗戰文芸研究会”が重慶に成立し、沙汀と艾蕪が名譽会長に推薦された。

1981年(昭56) 77歳

1月 11日、短論《練習写小説先從哪裏開始》を《中国青年報》日曜版に発表。

2月 文芸論文《怎樣獲得文学的技巧》を《四川文学》第二期に発表。

3日、短論《改善文芸的指導方法》を《四川日報》に発表。

本月、自伝体小説《我的幼年時代》が天津新蕾出版社から出版された。当該出版社編輯の《青年文庫》の中の《作家的童年》叢書三に入れられている。艾蕪はこの書のために特に《写在前面的話》と《校后記》とを書いた。《艾蕪近作》が四川の人民出版社から出版され、“四人組”打倒後のいろいろな作品三十一篇が収められている。

本月、艾蕪は雲南人民出版社の招きに応じて、第三回目の“南行”をした。同行者に作家の高繯らがいた。この時の道順は次の通り。

成都→昆明→楚雄→下関→大理→麗江→大理→保山→騰冲→盈江→隴川→瑞麗→畹町→芒市→保山→下関→楚雄→昆明

3月

28日、保山でその文学愛好者のために話をした。題目は《関于文学的一次談話》で、この話は後に《四川青年》と自修大学編輯印刷の《自修園地》第一期(1982年)とに登載された。

本月、短篇小説《瑪露—南行記続篇之一》を《収獲》第二期に発表。これは“南行記続篇之一”を副題とした最後の作品である。

本月、文学青年の自学自立を援助するために、共産党青年団四川省委員会は機関紙《四川青年》に“自修大学”を設け、艾蕪が顧問に任命された。彼の“与青年談文学創作”を題目とした一連の文章が《四川青年》に次々に登載された。最初の題は《写小説從哪裏起步—与青年談文学創作之一》で、《四川青年》第三期に発表。本月、27日、中国の現代文化の先駆者、偉大な革命文学家矛盾同志が逝去した。

4月

月初めに第三回目の“南行”を終えて成都に帰った。この旅行は約五十日、路程は約5000km、四つの専区、八つの県、16の人民公社を訪問した。本月発表した作品に随筆《游成都文殊院有感》があり、《文滙月刊》第四期に登載された。故事の《伏龍の神—何二流做了菩薩》が《龍門陣》(四川)第一輯に載り、文芸論文《怎樣把作品写得好?—与青年談文学創作之二》が《四川青年》第四期に載った。散文《我在仰光的時候—兼記万慧法師》を《中国現代文芸研究叢刊》第六輯に発表。

本月21日、魯迅生誕百周年記念委員会が北京に成立し、宋慶齡が主任委員に任命され、鄧穎超ら9名が副主任委員に任命された。艾蕪も委員の一人であった。

本月18日、《解放軍報》は特約評論員の文章《四項基本原則不能違反》を、23日、《時代的報告》増刊第一期は黄鋼の文章《這是一部甚麼樣的“電影詩”》を発表して、いずれも白樺の映画文学ストーリー《苦恋》を批判した。

5月

文芸論文《関于人物个性的描写—与青年談文学創作之三》を《四川青年》第五期に発表。

本月下旬、中国文联代表団の一行10名が朝鮮を訪問した。林黙涵が団長、艾蕪が副団長で期間は半ヶ月であった。

本月25日、全国優秀中篇小説(77年から80年まで)・報告文学(77年から80年まで)・新詩(79年から80年まで)の選考表彰大会が北京で開催された。

6月 《艾蕪小説選》が湖南人民出版社から出版された。30年から40年代に書かれた短篇小説二十篇を収める。初めに《序言》一篇がある。《文学手冊》が湖南人民出版社から複版で出版かれ、艾蕪は《複版后記》一篇を書いた。

本月中に、次の文章を発表した。散文《回憶矛盾同志》が《四川文学》に、《我是怎樣走上文学道路的》が《金沙江文艺》第二期に、遊記《大足石刻觀感録》が《旅游》第三期に、《〈春天〉書評読后》が《青年作家》第六期に、文艺短論《怎樣描写人物講話—与青年談文学創作之四》が《四川青年》第六期にそれぞれ登載された。

7月 文艺短論《創作的主要条件是甚麼—与青年談文学創作之五》を《四川青年》第七期に発表。

8月 文艺短論《把平凡的故事写得有趣味些—与青年談文学創作之六》を《四川青年》第八期に、《怎樣創造典型人物》を《青年作家》第八期に発表。文艺隨筆《南行雜感》を《文艺報》第十六期に発表。短篇小説《大外爺講的故事》を《紅領中》(四川)第八期に発表。

本月、中共中央宣伝部は思想戦線の問題の座談会を開いた。艾蕪はこの会議に出席して発言した。

本月20日、四川省優秀作品表彰大会が成都で開かれた。省委書記の譚啓龍と杜心源・任白戈らが大会に出席した。一世代前の文学家任白戈・沙汀・艾蕪・馬識途ら10名が表彰された。

本月22日、《四川文学》編輯部は“四川省1979~1980年の優秀短篇小説表彰”大会を開いた。艾蕪は会議に出席した。

9月 5日、散文《辺域》を《人民日報》に発表。8日、散文《再向魯迅先生學習》を《四川日報》と《四川文学》第九期に発表。文艺短論《怎樣開始—与青年談文学創作之七》を《四川青年》第九期に発表。本月4日から8日まで、西南地区魯迅生誕百周年記念學術討論会が成都で開かれた。艾蕪・任白戈らは開幕式に出席して話をした。開幕式に出席した作家に沙汀・馬識途らがいた。

艾蕪の話の題目は《我是怎樣認識魯迅先生的》であった。この話は本月22日の《中国青年報》に発表された。同時に《四川大学

学報叢刊)第十一輯《魯迅研究論文集》にも登載された。

10月

文芸短論《怎樣写背景—与青年談文学創作之八》を《四川青年》第十期に発表。散文《1981年・板門店》を《散文》第十期に、《柑子花香的時候》を《文滙月刊》第十期に発表。“南行記新篇之一”を副題にした最初の短篇小説《大山下的日蘭，縱戈》を《人民文学》第十期に発表。

本月、《文芸報》第十九期は唐因・唐達成の文章《論〈苦恋〉的錯誤傾向》を発表。

本月、四川省委員会は思想戦線問題座談会を開き、艾蕪はこの会議に参加した。

11月

艾蕪の創作生活五十周年を記念するために、四川人民出版社編輯部が《艾蕪文集》を出版した。《南行記》・《南行記続篇》と新たに収めた六篇の小説が含まれている。艾蕪は“南行”の道程を序文とし、これらの作品を新たに編集排列して序言を書いている。

本月発表した文章として、散文《金剛山游記》が4日の《成都日報》に、文芸短論《主題，大綱・場面轉換—与青年談文学創作之九》が《四川青年》第十一期に登載された。

本月5日から12日まで、中共中央宣伝部は“文学創作座談会”を開いた。

11日、四川で“文学評論座談会”が開かれ、艾蕪はこの会に出席して発言した。

12月

散文《早上在平壤城裏散步》を《文滙月刊》第十二期に発表。

1982年(昭57) 78歳

1月

散文《祝你們學習圓滿成功》を《四川青年》第一期に発表。

10日、旧体詩三首《獄中・狂風・夜行》を《解放日報》に発表。

20日、四川青年自修大学が開校され、艾蕪は招かれて漢語言文学の専門顧問となった。始業式に出席して講演をした。

2月

短篇小説《兩姊妹—南行記新篇之一》を《辺疆文芸》第二期に、《紅塵——一個看破空門者的自述—南行記新篇之一》を《滇池》第二期に発表。

3月

文芸短論《文学青年怎樣自修》を《四川青年》第三期に発表。

本月、巴金は“1982年度ダンテ国際榮譽賞”を獲得した。

本月22日、“1981年全国優秀短篇小説選考表彰大会”が北京で開催された。

本月25日から31日まで、四川省文联などが毛沢東文芸思想討論会を主催した。艾蕪はこの会議に出席した。

- 4月 散文《周年節日和年青作者談心》を《青年作家》第四期に発表。
散文《写作漫談》を《民族文学》第五期に、《祝賀(科学文芸)創刊三周年》を《科学文芸》第三期に、短篇小説《原始森林中—南行記新篇之一》を《十月》第三期に発表。

- 6月 短篇小説《大青樹下—南行記新篇之一》を《四川文学》第六期に発表。

本月19日から25日まで、全国文联は第四期第二次“全委会”を開き、会議は《文芸工作者公約》を通過させた。艾蕪はこの会議に出席した。

本月25日から8月10日まで、作家協会四川分会は第二期青年作者文学講習班を組織し運営した。修業式に艾蕪・馬識途らは講習班へ行き、学生たちと創作問題について話し合った。

- 7月 1日、北京から江西の廬山へ行き、全国文联が行なった“文芸之家”読書会に参加した。その期間を終えてから成都へ帰った。

本月29日から8月4日まで、四川省文联は第二期第二回の拡大会議を開いた。

- 9月 短篇小説《归来—南行記新篇之一》を《山花》第九期に発表。19日、散文《回憶一個美麗的国家》を《人民日報》に発表。

本月1日から12日まで、中国共産党は第12次代表大会を開いた。胡耀邦同志は第十一期中央委員会を代表して報告を行なった。題目は《全面開創社会主義現代化建設的新局面》であった。艾蕪は正式の代表としてこの大会に出席した。

17日、四川省文联は各協会四川分会の責任者と会合して、十二大精神を学習し徹底することを討論した。艾蕪は席上発言し、自分が“十二大”に出席した感想と理解について話をした。

- 10月 短篇小説《青春—南行記新篇之一》を《崑崙》第四期に発表。論文《江有汜—〈詩經〉新解之一》を《中小学語文教学》(青海師範学院編)第十期に発表。

- 11月 論文《十畝之間兮—〈詩經〉新解之二》を《中小学語文教学》第十

一期に発表。

12月 7日から12日まで、四川省社会科学院文研所と重慶地区中国抗戦文芸研究学会とが成都で抗戦文芸学術討論会を開催した。艾蕪はこの会議に出席し、席上報告をし、自分の抗戦時期の創作活動を詳しく紹介した。

25日、作家協会四川分会は成都地区の会員大会を開き、周克芹の長篇小説《許茂和他的女兒們》が矛盾文学賞を得たことを祝った。大会は馬識途が司会した。任白戈・艾蕪らが大会に出席して話をした。

今年、艾蕪はすでに79歳の高齢であるが、耳はよく聴こえ、目はよく見え、頭脳明晰で記憶力も良く、行動は健やかで不自由していない。目下、彼は強い情熱を燃やし、寸秒を惜んで創作に精出している。15篇の短篇を収載している《南行記新篇》はすでに全部脱稿して、今年、雲南人民出版社から出版される。40万語の長篇《春天的霧》はすでに初稿を書き終って手を加えているところである。この外、八巻本の《艾蕪文集》の編選と修訂の仕事をなお続けており、第二巻はすでに印刷へ回され、今年中には出版が期待されている。

“莫道桑榆晚 為霞尚滿天”（桑榆の晚きを道ふことなかれ、霞となりてなお天に満つ。）

多くの読者は艾蕪の青春が永からんことを心から願っているのだ。

後記：

- 一、《艾蕪年譜》は艾老の創作生活五十周年を祝って作成されたものであります。艾老は経験が豊富、著作が多いので、吾人の浅薄な学識や狭隘な見聞を以てしては、その偉大な半生の重要な行蹟と著述とを書き記すことは、確かに力、意に従わざる点が頗る多く、誤りや遺漏も多々あることと存じます。敢えて無礼を顧みずにこの草稿を急ぎ作成したのは実に“玉”を引き出したいという渴望に出づるものであります。文壇の先輩、専門家、読者及び艾老の親友の皆様、どうかお教を賜りますように。
- 二、1981年に発表した《艾蕪年譜》と比較しますと、《続篇》は体裁上異なる点があります。すなわち、検索の便のため重要な背景を年譜の文中に編入して、別記にはしておりません。

作 者

一九八三年三月十八日

上記の作者とあるのは四川大学中文系の黄莉如先生と毛文先生の両先生である。黄先生はお名前からして女性と見受けられるが、面識はない。ただ“艾蕪年譜”（四川大学学報叢刊第十二輯・四川作家研究）について書信の往来が一度あっただけである。

ところが、1983年12月1日、“艾蕪年譜”（続篇）を収めた“四川作家研究第二集”（四川大学学報叢刊第十九輯）が黄先生から郵送されて来た。これによって、戦後の艾蕪の行動を詳しく知ることができた。ここに黄莉如先生へ対し深甚なる謝意を表する次第である。

② 艾蕪の足跡と作品

前記の詳細な“年譜”から彼の足跡を辿ってみることにする。

1949年から1982年までの33年間に、その足跡は遠く東欧・ソ連・日本・北朝鮮へと延びている。国内でも第二次“南行”（1961年～1962年4月）・第三次“南行”（1981年2月～4月初）の足跡がある。青年時代、雲南・ビルマのあの苦難の旅と比較すれば、艾蕪の脳裡には必ずや異なった感慨があったに違いない。

またこの期間、1958年8月に、ラングーン時代の親友、黄綽卿と北京で再会できたことも忘れ得ぬ思い出となっているに違いない。

しかし、「文革」期の受難時代は看過できない。1968年8月17日から1972年3月8日まで、三年半近くも成都北郊の昭覺寺臨時監獄に押しこめられていたのだ。更に又、1960年の肺結核罹患という空白に近い一年もあった。

悲喜交々の時の流れに、彼の意志は堅きこと鉄の如く、心眼は光ること玉の如く、いささかの揺らぎも曇りも見せない。農村や工場へ積極的に身を挺し、農民や労働者の生活をも直接体験している。また多くの会議や座談会にも精力的に出席し、時には発言もしている。更に重要なことは高齢にもめげず、多数の著作をしていることである。非凡の文才無くしては到底成し得るものではない。

そこで、国外と国内とに分けて、彼の足跡を列挙してみると次の通りになる。

〔国外への旅〕

1. 1954年11月～1955年3月 ハンガリー・チェコスロバキア・ポーランド

ソ联

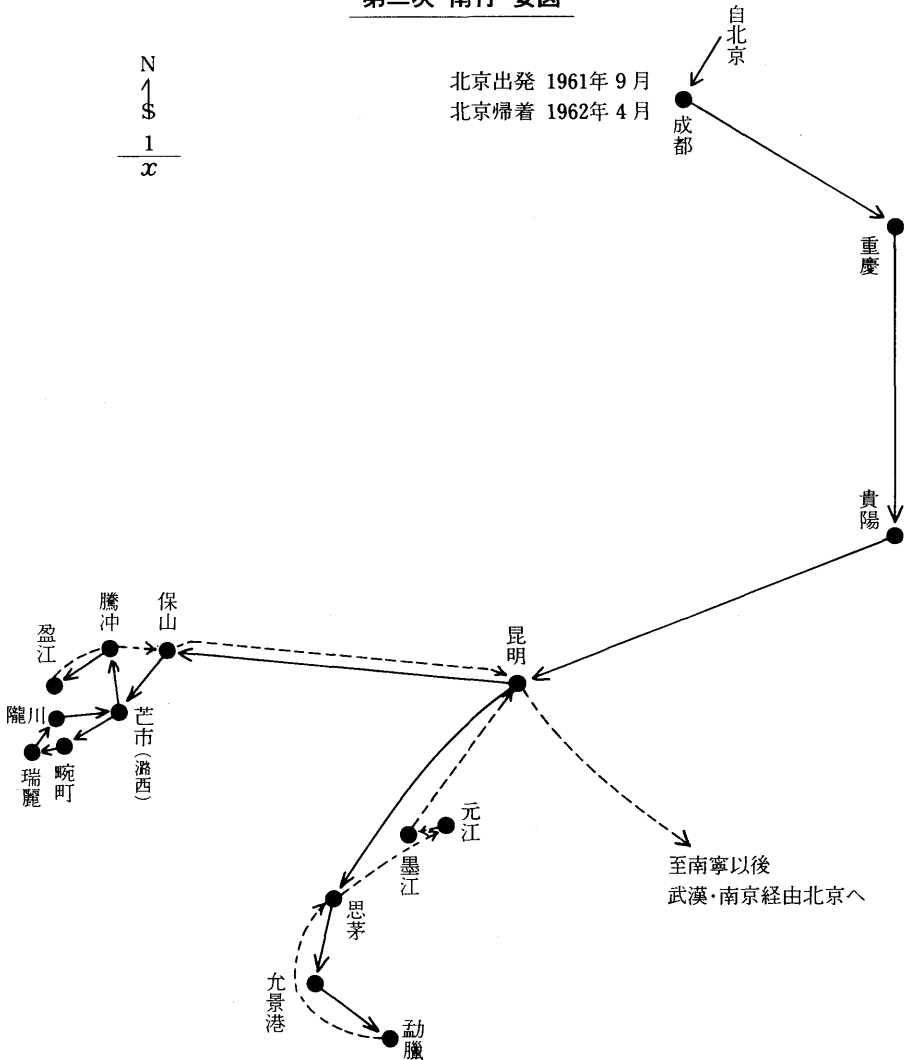
2. 1957年1月～1958年2月 ソ联
3. 1980年3月末～1980年4月16日 日本(六都市)
4. 1981年5月(約半ヶ月) 北朝鮮

〔国内での旅〕

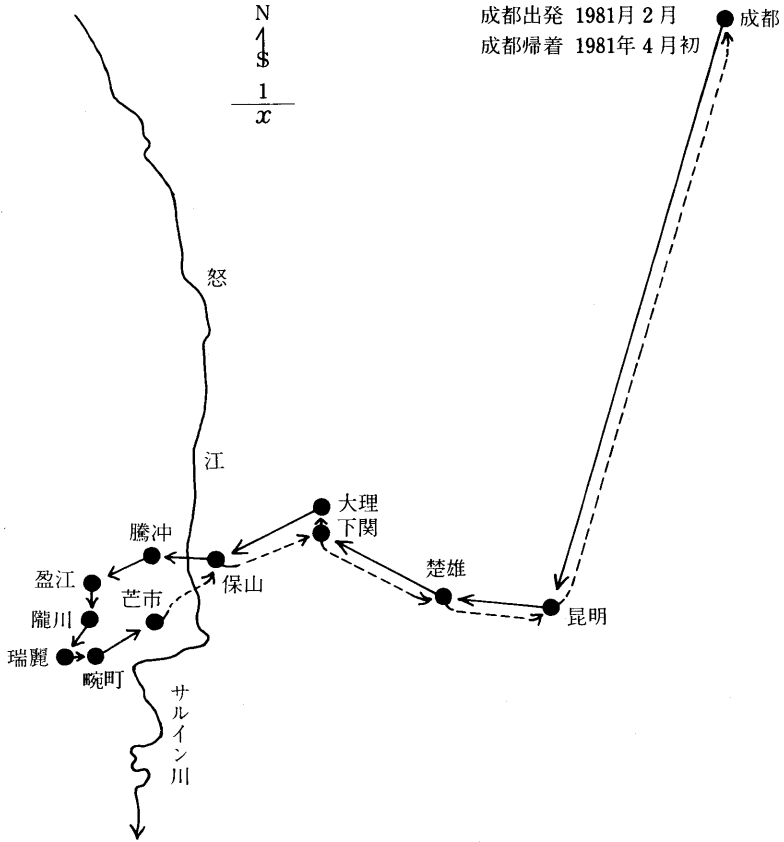
1. 1955年6月 北京→成都→重慶→北京
2. 1956年前半年 北京→瀋陽→鞍山→撫順→大連→丹東→北京
3. 1957年1月 北京→上海→杭州→紹興→寧波→四明山区→余姚→杭州→北京
4. 1958年4月16日 北京郊外の石景山製鉄所
5. 1958年5月～7月 十三陵ダム
6. 1961年5月 北京→保定→北京
7. 1961年9月～1962年4月 [第二次“南行”]
北京→成都→重慶→貴陽→昆明→保山→芒市→
畹町→瑞麗→隴川→芒市→騰冲→盈江→保山→
昆明→思茅→允景洪→勐臘→思茅→元江→墨江
→昆明→南寧→武漢→南京→北京
8. 1963年2月～6月 北京→重慶→成都→達県→南充→万県→成都→
北京
9. 1964年2月(2ヶ月余) 大慶油田
10. 1964年夏 北京→郫県→成都→北京
11. 1965年11月 北京→成都(成都に定住)
12. 1973年7月(約2ヶ月) 成都→宜賓→新市鎮→雷波→昭覺→美姑→布施
→西昌→成都
13. 1978年5月27日～6月5日 成都→北京→西安→成都
14. 1978年9月(20日あまり) 成都→大慶→鞍山→成都
15. 1979年6月(中旬) 成都→楽山→成都
16. 1979年10月30日～11月6日 成都→北京→成都
17. 1981年2月～4月初 [第三次“南行”]
成都→昆明→楚雄→下関→大理→麗江→大理→
保山→騰冲→盈江→隴川→瑞麗→畹町→芒市→
保山→下関→楚雄→昆明→成都

- 18. 1981年 8月 成都→北京→成都
- 19. 1982年 6月19~25日 成都→北京
- 20. 1982年 7月 北京→廬山→成都
- 21. 1982年 9月 1日~12日 成都→北京→成都

第二次“南行”要図



第三次“南行”要図



以上の旅行に基づいて、作品が続々と発表された。短篇小说集の“南行記続篇”・“南行記新篇”及び長篇小説“百煉成鋼”などがある。以下参考までに収められた作品名を列举する。

南行記続篇（人民文学出版社 1980年・北京）

序言・野牛寨・瀾滄江辺・芒景寨・姐哈寨・辺疆女教師・春節・辺寨人家

の歴史・攀枝花・霧・野桃桃・群山中・瑪米

以上12篇

南行記新篇（雲南人民出版社—昆明市書林街100号 1983年）

南行雜感（代序）・辺城・大山下の目闇—縦戈・原始森林中・大青樹下・両姉妹・歸來・柑子花香的時候・山村之夜・平靜の湖水・紅塵—一個看破空門者的自述・法師的円寂・青春・一個永葆青春的友人・后記

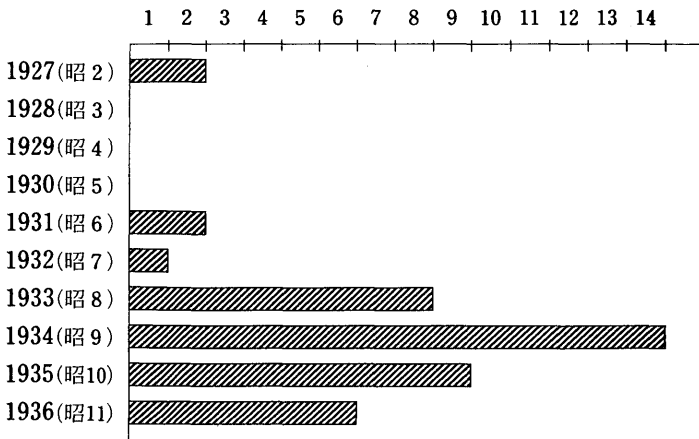
以上13篇

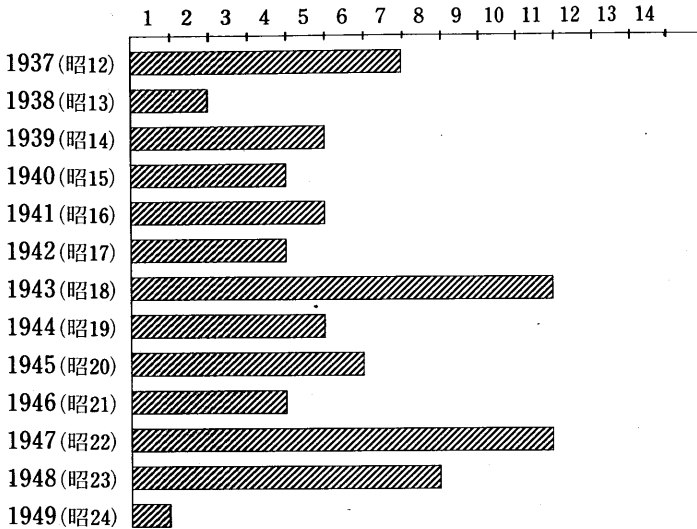
“艾蕪の雲南述懐”（《艾蕪近作》四川人民出版社・成都・1981年）で、“雲南は私の心に美しい種子を播いた。”（雲南在我的心上播下了美好的種子）と述べているように、彼の雲南への想いが極めて深いことが改めて分かる。“続篇”・“新篇”の中の作品は殆んどが雲南に取材したものである。

また、“文革”による擱筆の17年間と外国旅行の約7ヶ月、そして闘病生活の1年を除くと、執筆できる期間は15年か16年しかない。この期間に短篇小説とはいえ、合計25篇も書いている。やはり多作の作家である。

参考までに1927年から1949年までの短篇小説の著作篇数をグラフにして示すと、次の通りである。

艾蕪の短篇小説著作篇数（1927～1949）





合計 115篇

(四川大学学报叢刊第十二輯・黄莉如・毛文の「艾蕪年譜」に基づいて作成。)

この外にもこの時期の22年間に、中篇小説10篇・長篇小説11篇・散文95篇・論文25篇がある。

“南行”要図と作品数のグラフとを書き終り、机上の写真立てに飾られた艾蕪先生御一家の写真を見た。写真と共にノートの小さな切れ端がその中に挿入されていて、それには次の通り記されている。

工作就很快樂!

為中田先生來蓉，題這句話，

以作紀念

艾蕪

1982年8月14日于成都

一昨年夏、先生の自宅で昼食後、“何か座右の銘を”と恐る恐るノートを差し出すと、先生は即座に書いて下さった。“工作就很快樂!”(仕事こそ楽しいのだ!)というお言葉である。先生の仕事への情熱や信念を知り、畏敬の念を改めて深くした次第であった。“來蓉”の“蓉”の字は成都の別名である。

今年(1984)の夏もまた成都へ行って、艾蕪先生を訪問することになっている。これで三回目の訪問になる。上海から隴海線・宝成線に乗り、成都まで2353料

の汽車の独り旅である。しかも、外人専用の“軟臥車”は利用しないで、中国の一般大衆と同じ“硬臥車”での旅である。

確かに肉体的快適さは、軟臥車の方が遥かに勝っているし、それだけ料金も何倍か高い。しかし、旅費を節約するためにそうするのではない。中国の人々の心に触れる旅ができるからだ。

大袈裟な言い方かも知れないが、艾蕪先生の居られる成都は私にとって“聖都”である。そこには“聖地巡礼”にも似た満足感がある。肉体的に快適な旅は巡礼の旅ではないのだ。生命がある限り、この“聖都行”は続けたいと思っている。艾蕪先生は今年、八十歳の高齢だが、まだまだお元気で、心強い限りだ。

艾蕪先生になぜこれほど魅せられるのか、自分でも時には不思議に思うことがある。耳順の齢をすでに過ぎ、私は多くの人々と出遇いそして別れ、この間、年月も箭のように過ぎ去ってしまった。勿論、その中には今でも忘れ得ぬ人々がいる。しかし、艾蕪先生のような人はいない。毎年夏休みになると会いたいと思う。私の交際下手への反省があるのだが、それにしても、私の心を奮起させてくれる人は先生を除いてはあまりいない。

艾蕪先生と私の足跡が重なる場所がビルマ・雲南にいくつかある。騰越（騰冲）・芒市（潞西）・畹町・隴川・マンダレー・ラングーンである。これによる親近感だけで魅せられるのではない。一番惹かれる点は、先生の“強い意志”と“働く人々への思いやり”そして“謙譲の精神”である。

今年二月初、生まれた孫の“小名”を“寛容”と名付けたことからでも、先生の“人と為り”を窺い知ることができる。“老干部”であるのに少しも威張る様子がない。さすがである。

先生の作品“南行記”が映画化されたり、日常生活までがテレビで放映されたと、最近、成都から便りがあった。若い人たちも観たことだろう。

私は中国の青年たちが先生のように困難を克服し、強い意志を堅持し、彼らの祖国発展の為に奮闘するよう心から希望している。

第二次“南行”後に書かれた短篇小説“春節”を訳出してみた。若い新婚夫婦の仕事に打込む姿と息子を思う両親の心情とがよく描写されている。この小説から解放後の中国社会の明るい一面を瞥見することができる。特に自由結婚をした息子へ対する母親の複雑な心境がよく理解できる。

仕事に打込む青年こそ艾蕪の理想とする青年であり、これら新しい世代の若者の姿から、今後のあるべき中国社会の姿を予見できるような気がする。中国の青年たちの将来に、明るい展望があることを期待している。

③

春 節

深い霧はまるで小槽雨のようであった。路傍の樹葉の先端には水滴が附着していて、しきりにポタポタと落ちている。道は高嶺の麓を迂回した。山上の樹林は霧に覆われ、山の高さも分からない。だがやっと展望が開けて来た。麓には樹の伐り倒された跡が見え、路傍には材木が積まれている。道路の反対側は河に沿っていて、その付近は全くの密林で霧に蔽われている。時々、緑の樹葉が顔を出したが、薄い絹のベールをかぶっているようであった。清冽な急流が岩を噛み、純白の飛沫をあげている。流れが緩やかかところもあったが、一面の霧であった。

私たちはトラックターが拉く車に乗っていた。二三十名の乗客は大部分が傣族の女性で、途中で次々に乗ってきたのである。このトラックターは農場へ行って粃粟を運搬して帰るので、往きは空っぽだから、途中で次々に人を乗せた。公路は建設されたばかりで、長距離バスはまだ通っていなかった。それで、粃粟を運搬するトラックターが人を乗せる臨時の交通機関になっていたのだ。しかし、別に定刻通りに走るわけではなく、乗客も出逢ったら乗せるだけで、出逢わなければそのまま走った。車は坐り心地が悪いのは当然で、坐席は無いし立ったままで、時には身をかがめて、路上にはみ出た樹の枝を躲さねばならなかった。それでもいいことには車が緩くり走ると、沿道の景色が眺められた。象の群れが対岸の山林から水飲みに河岸まで下りて来るのが見えたらよいのにと私は期待したが、邪魔な霧がずっとその河辺に立ちこめていた。だが、道路寄りの岸辺の大きな樹々も趣きがあった。その樹の幹には大亀の背中のような藤の葉が巻きつき、鎧をつけた将軍のようであった。ある樹の頂上には紫がかかった藍色の小花をたくさんつけた藤の蔓が蔽いかぶさっていて、宝石で飾り立てた貴婦人のようであった。その他、ある大樹は完全に枯れ、濃緑の別の木に纏いつかれていて、生存競争のきびしさを見せていた。

車がカーブを曲った途端、キィッとブレーキがかかって停車した。皆はグラグラと揺れて互に衝突し、驚きのあまり悲鳴をあげた人もいた。私は一瞬すぐに見た。すると前方の薄い霧の中に二名の人影が山裾へさつとよけ、一人が連れの人を引張っているのが見えた。運転手が怒鳴った。“命がいらんのか。”発車させようとしていると、二名の人影から一名が突然足早にやって来て、意気まいて言った。“馬鹿野郎！ どんでもねえことを。他人行儀だな、路では。”

運転手はすぐに笑顔になった。“早くブレーキをかけなかったら、ほんとおお陀仏でしたよ。早く乗って、乗って。”

二人は車に爬いのぼって来た。爺さんと婆さんであった。“車は出ないと言ったのに、出たんだね。”と怨めしそうに二人は言った。

“正月は誰でもものんびりしてえのに、畜生メ、電話があつてさ。呼びに行ったら、あんたがたはもう出掛けてたじゃねえか。なんでそんなに急いだんだね。”と運転士はそう言って車を出した。

一見して、彼らは知り合いらしく、しかもかなり親しい間柄のようであった。そして、私には分かっていた。爺さんは町の国営食堂の名コックで、美味しい料理をさっと作るが、少し変屈な人であった。その日の味つけが薄くて、胡椒をもう少し入れた方がよいのにも思っても、彼へ直接、口に出して言うてはいけないのだ。そうしないと、翌日の料理は喉にも通らぬほど辛いのだ。婆さんは食堂で野菜洗い、茶碗洗いなど雑役をしていた。もしも、時刻外れに夕食を摂りに行くと、テーブルを独り占めし、楽しそうに独酌でチビリチビリやっている爺さんの姿が見られた。婆さんは調理場の窓口によく顔を出して小声で言った。“飲み過ぎたら駄目ですよ。”爺さんは“八の字ひげ”をそり反えて、腹でも立てたかのよう、“お前、もうちょっとまじなことを言ったらどうだい。もっとお飲みよぐらい言えよ。”と言ったものだ。

爺さんの名は廖利才といったが、人々はその名は呼ばないで、廖師傅と呼んだ。何時もはあまり口数が多くないが、夕食に酒が入ると言葉が多くなった。私は彼と何度か話をしたことがあるが、二人は辺境にやって来て、小商いをしたり、食べ物売る屋台を出したこともあったそうだ。若い息子がいた。若いと言っても今年もう二十歳で、老人たちの唯一の慰めになっていた。だが廖師傅はその息子についてはやはり不満があった。というのは、父の側近くにいる、仕事を引継ぎ、コックという仕事をするのを息子が嫌って、こっそり農場へ行き、トラクターの運転を学んだのであった。今日は春節の二日目、国営食堂は休みだから、妻を連れて息子に会いに農場へと急いでいたのだ。

私は彼らに挨拶をしてから、なぜ車も待たずにそんなに急いでいたのかと尋ねた。婆さんは包みに腰を下ろしていたが、嬉しくて堪らぬように言った。“わたしの息子が嫁を貰うんですよ。車なんか待ってはおれませんです。”

廖師傅はまだ腹の虫が収まらないようであった。“ほんに仕様のない奴だ。新しい嫁を連れ帰ると言うんだからな。姜さんがブレーキを踏まなかったら、来年の今日はお前の命日になるところだぞ。”

“お正月ですよ。少しはめでたいことを言ったらどうです。”と婆さんはプリプリしていた。うまい具合に、車がガタガタ揺れて話しにも力が要るので、

二人の口喧嘩は収まった。

十一時ごろになって、霧が霽れ始め、河の方の一番高い山には陽光が金色に輝き、緑の樹林を一面に照らしていた。すがすがしい朝の気分であった。停車して人々が乗り降りする時には、溪流のひびきに加えて、あたり一面に蟬の鳴き声が耳も聳する歌声のようであった。春節と真夏とが混り合ったようで、実に面白かった。溪谷の方は流れが見えず、公路の両側は傾斜地と水田になり、緑の若木、稲の苗、花をつけた甘庶が一面に見え、田植えがすんだばかりの稲も陽光に包まれていて、夏のような美しい眺めであった。そこで二人の老人は下車した。運転手の姜さんが爺さんをからかった。“酒はひかえ目にですよ。新しい嫁御の部屋に迷いこむほど飲まないで下さいよ。”

爺さんは笑ってやりかえした。“この野郎！”

私たちは午後には目的地に到着し、翌日の夕方には僂族の人々が砂糖黍を絞って砂糖を作るのを河岸で見物していた。流れを利用して水車を動かし、砂糖黍を絞って汁を出して、岸辺の鉄製の鍋に移し、温めて砂糖の液にしてから、砂糖の固まりにするのであった。岸辺には砂糖黍が山のように積まれていて、僅か“五分”の銭で一本買って食べられた。見物し始めてから間もなく、私はあの二人の老夫婦も砂糖黍を買いに来ているのに出逢った。なぜ息子夫婦のところにもっとゆっくりしなかったのかと私はすぐに尋ねた。爺さんはひげをピンと立て忌々しそうに言った。“あいつとは会っていないだから、一日だって一緒に居れるはずはないですよ。”

“会っていないって？”私には不思議だった。

爺さんは返答もせず、砂糖作りを眺めているふりをして、その方へ顔を向けていた。婆さんは怨めしように言った。“口をあけたら、縁起のいいことを言いなさいよ。何時になっても駄目な人だねえ。”私の方を向いて言った。“新しい嫁とは会えたんだが、それでいいんじゃないですかねえ。”

爺さんは最後まで言わず、すぐに遮ぎって言った。“何が新しい嫁かね、新婚の嫁らしくもない。わしに縁起のいいことを言えって—”

“相変らず減らず口をたたく人だねえ。”と婆さんは彼の言葉を遮ぎり、砂糖黍を一本、彼に手渡して、“お前さんのその口の穴を塞いだら—。”彼女は私の方を振り向き、“新しい嫁は世間知らずでねえ、めでたい嫁だよ。結婚早々というのに化粧一つせず、着ているものだって見ともない。体じゅう薄汚れ、油だらけになってさ、あのトラクターの下にもぐりこんでいたんだよ。人様に見せられた恰好じありません。”

私は笑って言った。“当たり前ですよ。トラクターの修理をしていたんですから、途中でいったんですよ。”

砂糖黍を口に入れようとしていた爺さんはすぐに離し、腹を立てて叫んだ。“あの嫁メ！ 仕事だって！ 昨日から休みだと分かってるんだ。地面に匍いつくばっているなんて、わしら二人のことなんか眼中にないんだ！”

私は笑って言った。“当たり前ですよ。あの人はトラクターを修理していたんですから。途中でですよ。” 爺さんは砂糖黍を口許へ持って行ったが、すぐに戻し、腹立しげに悪態をついた。“畜生メ、あれが仕事だと、休みは昨日からなんだ、それに地面に腹匍って仕事かい。わしら二人を親身で迎える気など無いのさ。”

“まあ、すぐ人の悪口を言って。”と婆さんは彼を怨み、一方では私へ説明した。“あの嫁はお前さんに親切とは言えませんよ。食事をしにお前さんを食堂へしゃあーしゃあーと連れて行ったじゃありませんか。若くて世間知らずですよ。服も着換えず、油だらけでお前さんと一緒に腰掛けましたよ。それになんと、どうです。あの嫁は“お父様一杯いかがですか”と尋ねてみることもさへ辨えていないんです。” 爺さんは酒を一杯やらないと、その日が暮れないのであった。

“いらんことをごたごた言って。”と爺さんは砂糖黍にかぶりつきながら叱るともなく叱ってから、馬鹿にして言った。“お前はほんに眼が利かないんだなあ。嫁っ子をお前の代には見たことがないから、あの嫁から“お母様”と一言、言われてみろ、お前はすぐ骨抜きになるぞ。今にきっとあの嫁はお前の首の根っ子を押えつけてしまうぞ。”

“お前さんがいつまでもしっかりしていないだけです。”と婆さんは恨めしそうに言った。“しっかりしていたら、とつくに嫁が何人も私の前にちゃんと立ってたはずですよ。”そして私へ言った。“わたしはたくさん育てましたよ。息子五人と娘三人です。”

“仕方の無いことだよ。マラリヤの悪霊が子どもたちをごっそり連れ去ったんだ。わしの責任じゃないよ。” 爺さんはひげを立て、彼女の言葉をはねつけ、私へ説明した。“昔はこのあたりはマラリヤがひどくてね。一度とりつかれたら、口が利けなくなって、一日二日でお陀仏でした。”

私は間髪入れず尋ねた。“今でも、そんなマラリヤがあるんですか。”

“解放当時はまだありました。後で病院や衛生ステーションが建ってから少なくなりましたよ。” 爺さんは言い終ると、婆さんの方を見て、半分馬鹿にし半分叱かるように言った。“お前の責任だぞ、何年か早く生み過ぎたのは。今は子ども

生んでも大丈夫。病気になっても病院が注射したり、薬をくれたりするからなあ。”続いて興奮して私へ言った。“ご存知なからうが、昔、このあたりは医者はいないし、銭もかかったし、貧乏人は死神にとりつかれて生きているだけでした。昔、こんな二口言葉がありましたよ。“身重な女はいるだけで、通りにゃ子どもが見えもせぬ。”つまり、子が育たないと言っているわけで、ほんに憐れなものでした。”

婆さんは涙ぐんで言った。“昔は何度、神様に祈り、仏様を拝んだか分かりません。額も破れるほど叩頭したものです。あの当時はね……”

爺さんは彼女の方へチラリと眼をやり、不満そうに頭を振ってから、責めるように言った。“砂糖黍でも嚙れよ。昔話を始めたら限りが無いんだから。”老夫婦はここに何をしに来たのか、その時やっとな私を尋ねてみた。親戚にでも会いに来ているのだろうか。

“うーん、わしだったら帰ってよかったんだが”と爺さんは不平そうに大声を出した。“こいつがぜひ息子に会いたいと言うもんだから”続いてプンプンして婆さんへ尋ねた。“息子は何処だ、何処なんだ?”“わたしあ、お見通しだよ。この二日、酒が切れたんで、よく無理難題をふっかけてるのが。”と婆さんはしきりに発き立て、私へ弁解した。“あの子は公用中です。わざと逃げ隠れしてるんじゃないんです。昨夜、夜中に車を出したと今日、分かったんです。”

“いくら言ったら分かるんだ。いつも馬鹿なことばかり言って。”爺さんは恥ずかしさをはぐらかすように、少し腹を立てて私へ言った。

“皆が言っていましたよ。新婚だから正月がのんびり迎えられるって。ところがあいつは僕が行く、僕が行くと胸をたたいて言ったそう。畜生メ、年寄りをひどくがっかりさせたもんだ。あ、来なければよかったんです。行こう行こうとこれが引張るもんだから。それにもう一寸で、車に跳ねられそうにまでなってる。”“そうでしょうよ。来ないで一日中、酒の徳利の番をしていた方がよかったのでしょうよ。”婆さんも口では負けていなかった。すぐに私へ言った。“あの子は道路修理へ行ったんです。人はたくさんいるんですから、あの子に空き腹で正月させるなんて。あの子だからこそ夜中でも行くんですよ。誰が行く人なんか居るもんですか。息子は小さい時から気立てがよくてね。”

“うん、あの子がきつと言いだしたのさ。結婚のことを考えてくれたら、あの子でなくても行く人がいるのにさ。”爺さんは私に説明してから、また怨めしそうに言った。“小さい時から強情で、調子者で、みんなとワイワイやるのが好きでしたよ。あの子は出る幕じゃないと分かっている手を出したがつたもんです。”

一昨年、農場へ行かせなかったら、何を言っても言うことを聴かなかった。トラクターがあの子の心をすっかり引張って行ったんです。”続いて婆さんへ嘲笑して言った。“これもみなお前が甘やかしたからだ。あの子のせいじゃない、今、報いが来てるんだ。雲隠れしてしまったじゃないか。”

“縁起でもない。いい加減にして下さい。”婆さんは腹を立てて顔を紅らめ、“この新年の正月に、少しはましな話でもしたらどうです。”私は二人を慰めて、“仕事が終わったら、引返して来ますよ。”と言った。

“そうですよ。きっと来ますよ。待たなくてはね。”婆さんは気を静めて嬉しそうに言った。“ねえ、お前さん、今晚あの子に言ってやるよ。ぜひ酒をお出してね。帰りましょう。すっかり晩くなってしまっ。”

爺さんは一寸、嬉しそうだったが、そこでもプリプリして言った。“待つんかね。食堂は開いているかな。”しかし、爺さんは砂糖黍を手にしてしおらしく後に跟いて歩き出した。その時、砂糖を煮つめていた傜族の男女は、しばらく休憩をとって、泳ぎに河の方へ走って行った。

二三日後に私たちは帰って行くことになった。前と同じくトラクターが索引する車に乗った。昼食をすませてから出発した。霧はもう霽れ、山々と原野はそのまの姿をはっきりと陽光の下に見せ、爽やかな感じで、すばらしい眺めであった。とりわけ、河沿いに走る時には対岸の山林が見え、それは黒、濃緑、うすい青の層という具合にそれぞれははっきりと色が分かれていた。雲も緑の葉のように光の波を閃めかしている。

ぎっしり隙間なく茂った樹林、更に成育している多くの小さな植物、負いかぶさり葉を一面につけた藤の蔓、このような原始林のムードはいつそう楽しいものであった。その日に野生の象が森林から出て来て、河辺で水を飲むのが見られたらよいのと私は思った。

トラクターが拉く車には粟粟の袋が山積みされていて、乗客は二三人の余裕しかなかった。途中、乗りたい人たちが手を振ったが、みな断わられてしまった。しかし、大樹の下で、車は急停車し、運転手が車から跳び下り、樹の下めがけて走って行った。驚いたことには、樹の下に腰を下ろしていた二人は廖家の老夫婦であった。運転手は来た時の人ではなくて、年がもっと若く、小柄で丈夫そうに見えた。赤黒い顔をしていたが、満面笑みを浮かべていた。彼は二人の老人の荷物を持ってやって、車に乗るように勧めた。その時、私たちのそばに居た娘も跳び下り、婆さんの介添えをした。婆さんは乗る時、私へ嬉しそうに言った。“これがわたしの息子と嫁です。”

爺さんは確かに喜んでいましたが、それでも怨めしそうに言った。“お前らはわしら二人をさんざん歩るかせておいて、よう車に乗っておれるもんだ！”

息子も車に上がって来た。彼は二人の老人のそばに腰を下ろし、恐縮して言った。“ずっと知らなかったんです、来たのを。今朝始めて知って、車を飛ばして追いかけて来たんです。”その様子から見ると、息子は一本気で、すぐ感動する性質らしかった。

爺さんは揶揄って言った。“お前らは家の仕事の方が大事なんだな。狐につままれたような目に過わせておいて、盲がすっぽんを撫でまわすみたいだ。”

車は動き前進した。彼の若い嫁が運転しているのだ。彼女は胸を張り、よく慣れた様子でハンドルを握っていた。短い二本の“お下げ”が肩にかかり、横顔は張り切っていて、少し紅潮していた。婆さんは嫁が運転しているのを見て、嬉しそうに口を大きく開けて笑った。しかし、振りむいて息子を見下した眼は少し涙ぐみ、黙ってはおれないで言った。“どうして、そんなにのんびりしておれるんかね。一年あまりも会いに来ないでさ。もしも母さんがあの世に行ったら……”と口籠もって、唇を震わせるだけであった。

息子は慌てて弁解した。“お母さん、分かっているでしょう。正月だってさ、忙しいんだよ。運よく今日、上役が僕らに二三日休暇をくれたんだ。お母さんたちと会いに急いで帰って来たんだよ。”

爺さんが不満そうに言った。“これが休暇と言えるかい。”

息子が微笑して言った。“町へ行くついでに粃粟を運んだらいい、途中でお父さんたちも拾えると思ったんだ。”

“お前は今度、勝手に嫁を貰ってしまって、ますます家のことなんか忘れてしまうんだね！”婆さんは口を開くとそれだけ悲しくなって、しきりに涙を拭いた。

爺さんは腹を立てて言った。“新年の一月というのに、何で泣いたりするんだ。お前が泣くと車までひっくり返るぞ。”

息子は母親へ泣かないようにとなだめながら、父親へ言った。“転覆なんかしないよ。彼女は近ごろ“一等模範”に選ばれてなったんだよ。去年、彼女が耕した畑は広くてきれいだよ。”続いてまた母親へ言った。“彼女は賞品まで貰ったんだよ。手拭い、洗面器、石鱈、みな持って来てるから、母さんたちへあげるよ。”

母親は次第に嬉しそうな顔になって、声を低めて息子に尋ねた。“お前は賞品貰ったかね。”

息子は慌てて言った。“貰いましたよ。家に帰ってから見せますよ。”また爺さんの方へも言った。“酒二本手に入れて、持って来ていますからね。”

爺さんは我慢し切れず嬉しそうに私たちへ言った。“今晚、食堂の方へおい出なされ。祝い酒を一献差し上げたいんで。”

ずっと楽しくそばで聴いていたが、私たちがやっと祝いのことばを述べる番になった。“おめでとう、お二人は幸せですね。”

“幸せだなんて、食べる飯を自分でまだ作らねばならんのに。”と爺さんは自分を嘲けるように言った。

婆さんがすぐ遮ぎって、“誰がお前さんにその腕前を習わせたんですか。それでなんとかおまんまも戴けて来たんでしょ。末っ子にまで習わせようとしたくせに。”

息子が突然“アッ”と叫んで父親を引張ったが、間に合わなかった。道路上に出ばった樹の枝が爺さんの頭の黒い毛糸帽を剥ぎ取って、車外へ落してしまったのだ。息子は慌てて車を止めさせた。停車させた女の運転手へ怨めしそうに言った。“君、ゆっくり走れよ。”と言いざま帽子を取りに跳び下りた。

嫁は何事が起ったか知っていた。振り向いて我慢できずに笑い出した。

爺さんは嫁を見下ろし、笑いながらそっと言った。“仕様のないお転婆さんだね。”帽子が車から飛んだのは嫁が仕掛けた“いたずら”らしかった。

今度は息子が交代して運転した。嫁は車に上って来て、二人の老人の間に腰を下ろした。一方の手で婆さんの手首を、もう一方の手で爺さんの手首を引張った。大ようでわざとらしさが無かった。そして彼女は言った。“こうしていたら、揺れても大丈夫ですわ。”

婆さんは幸せで満面笑顔、爺さんは少し慌て気味で、手首を引き抜こうとはしたが、逆に嫁からギュッと引張られたのであった。

車はゆっくりと走った。河の流れが岩を噛む響きや蟬の鳴き声がしきりに聞こえた。陽光は樹木をキラキラと照らし、流れを、公路を、そして車上の人々を照らした。すべてが光り輝き喜びに溢れていた。だが私はいささか不満であった。水飲みには野象の群れが河辺に下りて来なかったからだ。

1962年12月19日 北京

1984年4月25日于樟東書屋記

(昭和59年4月26日受理)